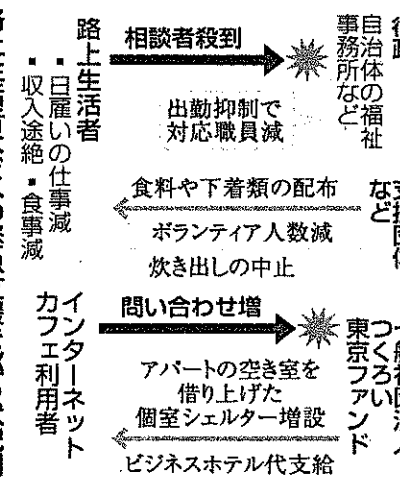
5/10 東福

ホームレス支援ピンチ

東京の団体「空腹の人増えた」

新型コロナ

路上生活者などへの緊急支援を巡る状況例



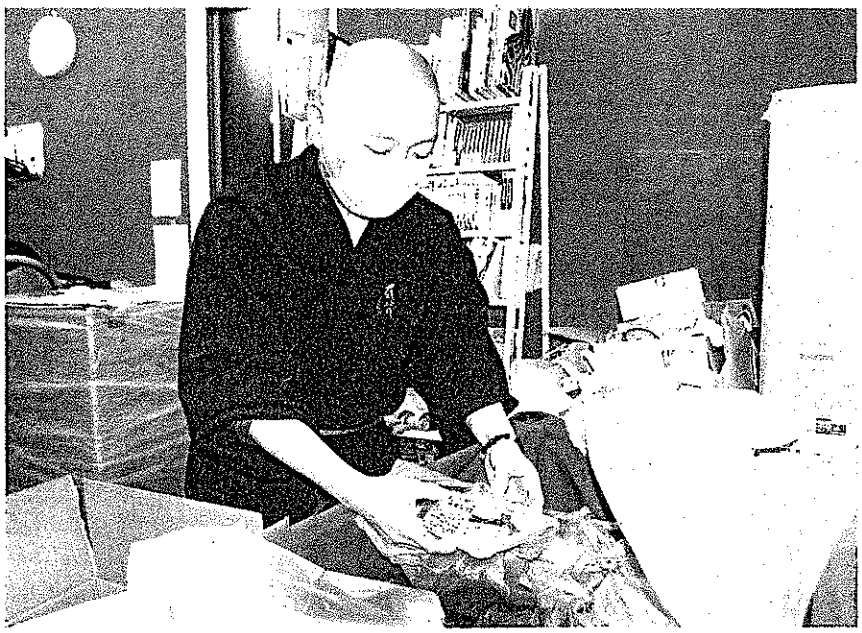
新型コロナウイルスの感染拡大は、路上生活者（ホームレス）にも影響を及ぼしている。緊急事態宣言を受け、支援活動が難しくなっていることも要因となり、食事を取れない人が増加。健康状態が悪化すると感染リスクが高まるが、適切な医療を受けられる保証もない。失業してホームレスとなる人が増える恐れもあり、支援者は懸念を強めている。

「目に見えて、おなかをすかせている人が増えている」

そう話すのは、東京・山谷地区を拠点にホームレスを支援する任意団体「ひとさじの会」事務局長の吉水岳彦さん(四)。

同会は月二回、上野公園周辺などで手作りのおにぎりを配ってきた。四月からは三十～五十人集まるボランティアを中止し、頻度を増やして毎週月曜日に数人で既製の弁当やマスク、下着類などを配布するようにした。

他の支援団体も三月中旬ごろから炊き出しを中止するところが増えた。日雇いの仕事が激減し、ただでさえ乏しい収入も途絶え、食事を取る機会が減っているという。



ホームレスに配布する弁当を準備する「ひとさじの会」の吉水岳彦さん＝4月13日、東京都台東区で

健康面も不安だ。普段でもホームレスは救急搬送の際、病院をたらい回しになる例がある。ホームレスからは「マスクがなくなった」「急に具合が悪くなったら心配だ。風邪薬を持っておきたい」との声が聞かれる。

感染防止のため、弁当などを配る際の会話も最小限。吉水さんは「『最近どう？』とか、たわいない話をして変化に気付くコミュニケーションの時間でもあるのだが」ともどかしそうだ。

ホームレスなどに住居支援を行う「一般社団法人つくろい東京ファンド」代表理事の稲葉剛さん(五〇)も危機感を強めている一人だ。

感染拡大を受け、生活困窮者のため、アパートの空き室を借り上げた個室シェルターの増設やビジネスホテル代の支給などの緊急支援を実施。メールで相談を受け付けたところ、インターネットカフェに宿泊していた三十～四十代の人たちからの問い合わせが相次いだ。

稲葉さんは「居場所を失って路上に出されてしまう人が増えるだろう」と指摘。「行政が、空き室を借り上げて提供するなど、災害時と同様の対応が必要だ」と訴える。

しかし、行政も余裕がない。「生活保護の申請を受け付ける自治体の福祉事務所などは、出勤抑制で対応する職員が減ったところに、相談者が殺到している。『福祉崩壊』が起こりつつある」と話した。